



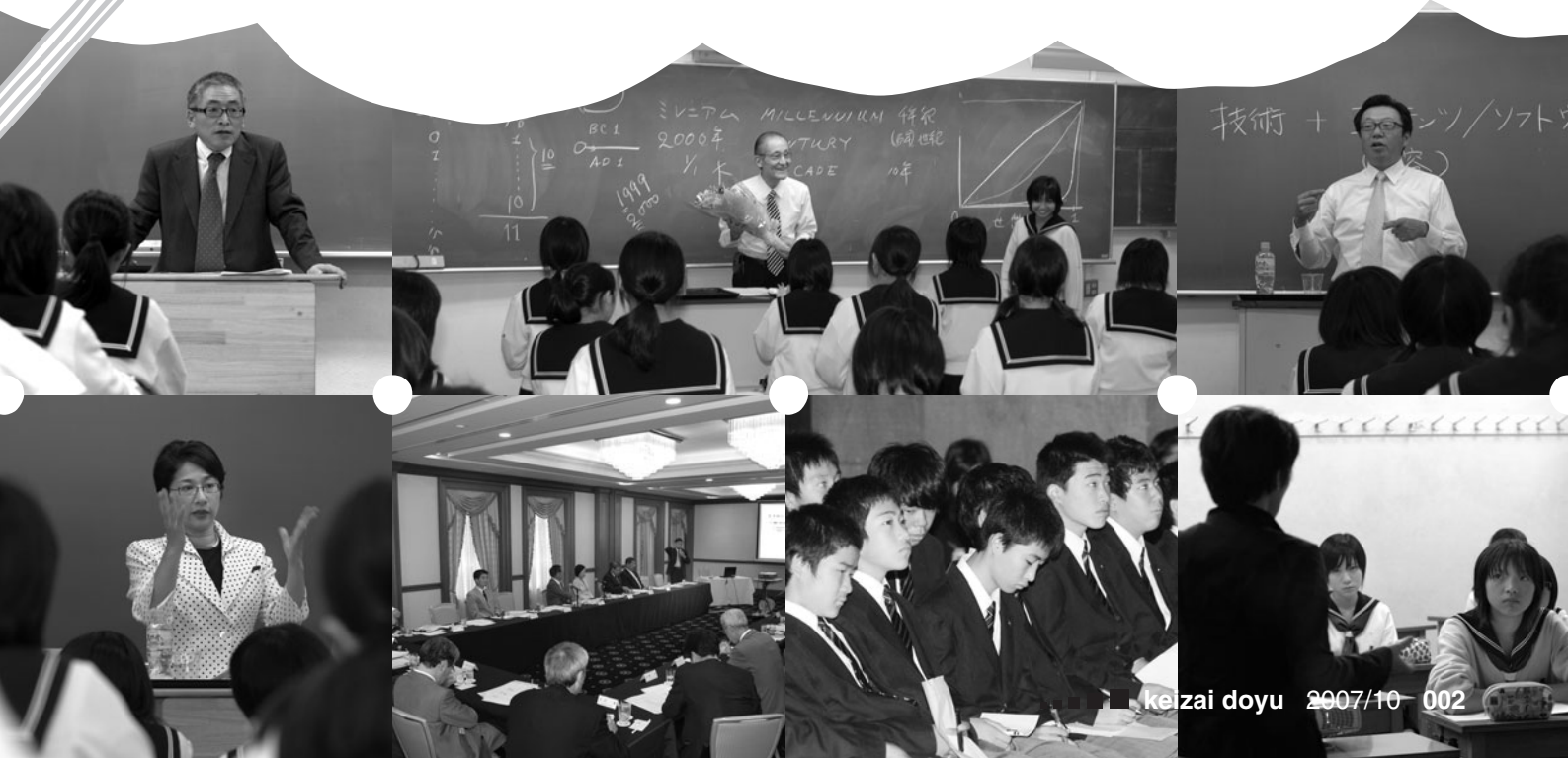
学校と企業・経営者の交流活動推進委員会

出張授業 レポート '07

出張授業を実施した学校の先生は、異口同音に「やはり“大人”の話は生徒もよく聞く」と語る。
 会員による出張授業が開始されて9年目、「学校と企業・経営者の交流活動推進委員会」（以下、委員会）が発足して5年目となる現在、貴重な出張授業の機会をどう活用するのか、学校側も様々に工夫している。
 出張授業の質的向上を目指す委員会の取り組みと併せ、交流活動の最新動向をレポートする。

私立國學院大學久我山中学校女子部 — P.003
 足立区立千寿青葉中学校 — P.005

練馬区立石神井西中学校 — P.007
 出張授業オリエンテーション — P.009



継続的出張授業を 就労観育成のための 年間学習に活用

私立國學院大學久我山中学校女子部



継続性のある出張授業を、年間の学習計画に組み込んでいるのが、私立國學院大學久我山中学校女子部（東京都杉並区）だ。同校は、キャリア教育の一環として「シリーズ『働くということ』」を2年生を対象に実施しており、出張授業は以下のような年間計画に基づき2回行われる。

5月	出張授業1回目 校外学習（職業調査）
夏期課題	職業訪問、レポート
9月	文化祭での展示発表
10月	出張授業2回目
11月	クラスごとの発表会

1回目の出張授業は5月11日に行われ、茂木賢三郎氏（副委員

長／キッコーマン取締役副会長）が担当した。茂木氏は、「人（大人）は、なぜ、働くの？」をテーマに、2年生全員を対象に授業を行った。

2回目の出張授業は10月12日に行われ、茂木氏、小林いずみ氏（副代表幹事／メリルリンチ日本証券取締役社長）、島田俊夫氏（シーエーシー取締役社長）、志村康昌氏（ユーシーシーフーズ取締役兼執行役員副社長）、永田順子氏（日本航空インターナショナル執行役員）の5名が講師を務めた。この時の授業の狙いは2つ。ひとつは、「世の中のしくみを知ろ

う！そして、今やるべきことは？」をテーマに、経済社会全体に対する理解を深めること。もうひとつは、仕事を「創・工・商」の3領域に区分し、講師が各々の領域に関して専門的な説明を行うというものである。

こうした継続的な関わりは、生徒や学校への効果も大きい。特に、同一講師が複数回担当することで生徒に対する理解が深まり、生徒の変化を観察して学校に対して適切なフィードバックを行うこともできる。交流活動の発展的形態として、委員会でもその意義を高く評価している。

高橋秀明主任教諭に聞く「出張授業の役割とは」

2年時の学習である「シリーズ『働くということ』」に、経済同友会の出張授業を3年前から活用しています。昨年度からは、貴重な出張授業の機会をより有意義にシリーズに組み込むべく、シリーズのスタート時とまとめの段階で2回、出張授業をお願いしています。

一学期に行う職業調査は、学校生活の中で接点のある職場へ生徒を行かせています。まず身近なところから「働くということ」を考えてもらおうというものです。

それに対して出張授業は、社会全体の仕組みを見渡しながら、働くことの意味を考えてほしいとい

う狙いです。2回目の出張授業は5グループに分けて行っていますが、「創・工・商」のどの領域の仕事に関心があるのかで、生徒が選択できるようにしています。これからの社会における女性の役割を考えると、幅広い見識と多彩な経験、そして高い志を持つ企業経



5月には、世の中にはいろいろな仕事があるというお話をしましたが、今回は仕事というものを「創」「工」「商」の3つの視点から考えてみましょう。例えば、皆さんが毎日食べているパン。この原料は小麦ですが、ほとんどがアメリカやカナダなどからの輸入です。では、小麦を栽培する仕事はどの領域に属すると思いますか？ 一般的には「工」に分類されますが、その中身を掘り下げていくと、「種から育てる＝工」

茂木賢三郎氏

いろいろな仕事を支え合い、
毎日の暮らしがある

「品種改良する＝創」「資金を集めて品種・収穫量を増やす＝商」など、実に多様な仕事絡み合っています。同様に、小麦が米国から日本のパン工場に届くまでには、「船や列車での輸送」「商社や銀行を通じた決済」「損害保険への加入」といった「商」の仕事が絡んできます。パンひとつとっても、これだけ様々な仕事と大勢の人々が関わっていることがわかってきたと思います。

私は外資系企業に勤めていますが、仕事を通じて学んだことのひとつは、「今の価値と10年後の価値は同じではない」ということです。皆さんと同じ中学生の頃には「女性がずっと働きたければ、教師か薬剤師になりなさい」とよく言われたものでした。しかし、私が卒業する頃には社会も変わり、女性のできる仕事も増えました。ですから、焦って進路を決めるよりも、今は自分のやりたいことを探すほうが大事

小林いずみ氏

学校の試験と会社の仕事は、
全く違うもの

だと思います。また、社会に出ると、予想外のことが予想外に起こります。結婚すれば仕事をしなくていいと考えている人だって例外ではありません。生きていくために仕事をするという覚悟は必要でしょう。

それから、学校の試験と仕事は全く違い、やるべき仕事が全部できてようやく0点で、できない分はマイナス。実は仕事って、皆さんが思っている以上に難しいのです。

営者のお話を直接聞けることは、生徒にとって大きな意味があると思います。

年間の計画は当校で作成し、それを基に経済同友会へ細かな依頼をしています。日程や講師の人数、授業内容等々、ほぼこちらの希望通りに実施できています。特に、

事前の打ち合わせにも喜んで時間を割いていただいたり、授業用の資料作成にもこちらの意向をくんでいただいたりと、講師の方々に本当に感謝しています。

このシリーズは、いろいろな方から話を聞いたり情報を集めたりする中から、生徒たちみんなで働

くことの答えを探していこうという企画です。ところが経営者の方と接する中で、実は教員も勉強させてもらうことが多いと痛感しています。マンネリ化することなく、今後もよりよい出張授業ができるよう、我々も努力していきたいと思っています。



少人数制出張授業の他 創立5周年記念として 北城氏の講演会を実施

足立区立千寿青葉中学校

足立区立千寿青葉中学校は、2002年4月に2つの中学校が統合して生まれた。しかし、足立区では学校選択制を採用しており、創立2年目には同校への入学希望者は統合前の2校の生徒数に比べ半数以下という、非常に困難な状況であった。

2003年、現校長の花岡恵三氏が着任し、学校改革に乗り出す。この改革における重要な取り組みのひとつが、経済同友会の出張授業の導入であった。2004年度以降、少人数制の出張授業を年2回実施しており、同校への講師派遣は過去3年間で延べ30名以上となって

いる。花岡氏は、「学校改革に対する強い姿勢を、生徒・教員・保護者・地域の人たちに広く知らしめていくことに、出張授業が象徴的な役割を果たした」と語る。

創立5周年となる今年度は、新入生の数が相当程度まで回復。学力や課外活動の面でも、学校改革の成果が見られるようになってきた。そして、その創立5周年を祝う行事の一環として、「ぜひとも北城氏に記念講演、懇談会をお願いしたい」というのが、学校側の要望だった。

同校からの熱心な要請に応え、10月10日、北城恪太郎氏（前代表

幹事／日本アイ・ビー・エム 最高顧問）の記念講演会が実現した。北城氏は全校生徒に向けて講演を行い、生徒からの質問にも熱心に応えた。その後、保護者・地域住民との懇談会に出席し、幅広く意見交換を行った。

一方、同校で実施されてきた少人数制の出張授業は、今年度も秋以降に2回行われる予定だ。内容的にも工夫が重ねられ、「なぜ学校で学ぶのか」を考えさせる授業（1年生対象）、面接指導等も含めた実践的授業（3年生対象）というように、目的を明確にした企画が準備されている。

北城氏が語る「中学生、学校現場に最も伝えたいこと」——

中学時代というのは、進路を考える上で特に重要な時期であるはず。ところが、今の子どもたちは自分の将来のことをあまり考えていないのではないのでしょうか。（親から言われていることもあり）「どこの学校へ行くか」に対する関心は高いようですが、本

当に大事なものは「学校を出た後に何をするか」です。一方で、日本の子どもたちは豊かで、働くことに対する動機を見つけるのがとても難しいという現実もあります。だからこそ、「働くとはどういうことか」「自分の将来をどう考えていけばいいのか」について、大

人はもっと語りかけるべきです。

我々が、主に公立の中学校を対象に交流活動を始めたのは、「進路がある程度決まる前の段階で、将来のことを考える機会を作りたい」という理由からです。

もう一点、「企業の変化を学校の現場に伝える」ことも、非常に



地球規模で市場競争が進行し、中国やインドが目覚ましい勢いで発展しています。経済の規模では現在、1位アメリカ、2位日本、3位ドイツ、4位中国ですが、その成長率は日本が年2%前後なのに対し、中国は年10%の勢いで伸びています。これから我々はこの隣国ともっと協力し合わなければならないでしょうし、経済上の競争もしなければなりません。

私は仕事を通じて多くの中国人と接

未来に生きる生徒たちに望む
21世紀に求められる人材について

してきましたが、彼らの「豊かになりたい」という思いは日本人より遙かに強く、特に学生は寝る間も惜しんで勉強しています。おそらく皆さんは「豊かな暮らしをしている」という実感がないかもしれませんが、現在の生活レベルを将来的に維持していくためには、欧米だけでなく、中国やインドで働く人を上回る質の高い仕事をしていく必要があるということを覚えておいてください。

今、中国やインドは、単なる製造拠点から開発拠点へ脱皮しようとしています。中・印の理工系大卒者が年40万人ほどなのに対して、日本は6万〜7万人。海外の企業は中・印に研究・開発部門を移しているのが実情です。中・印も豊かになろうと必死ですから、この流れは止められないでしょう。ですから日本は、常に彼らにできないようなことを目指して、努力していくしかないのです。その時に、“〇×式の暗

日本の発展のために
なぜ教育改革が必要なのか

記”ばかりしてきた学生が社会人になったのでは、他国にできないことを創造していくのは難しいというのが、我々の心配する点です。

安倍前政権は、国として「イノベーション」が重要であることを掲げました。しかし教育改革では「イノベーション」について語っていません。イノベーションを担う人材を教育によって育ててこそ、国の発展が可能になるのだと思います。（保護者の質問に答えて）

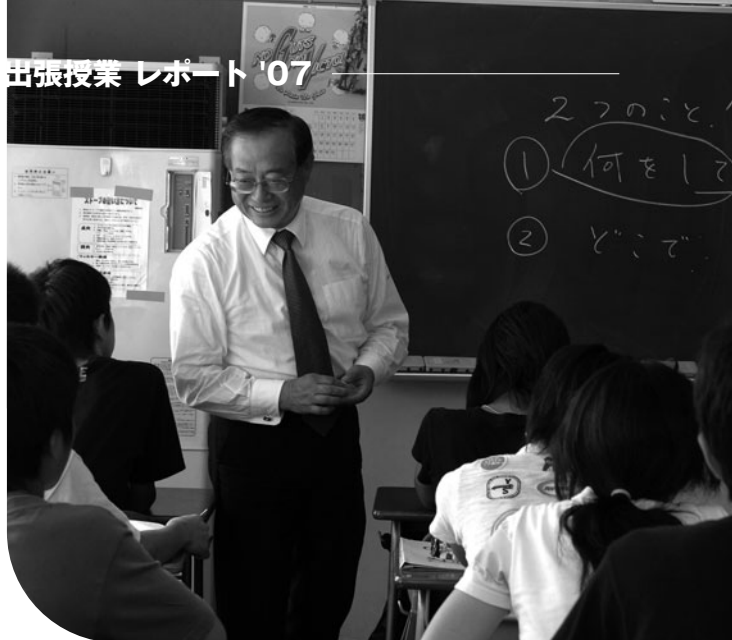
大きな意味があると考えています。今の経済界が求めている人材像とは、自ら課題を見つけて解決するとか、難しい問題に挑み続ける情熱があるといった人材です。にもかかわらず学校では、正解を覚えて答えられる人材を育てるような教育が続いています。これを

経済界が求めていたのは、もう10年も20年も前のことです。現状のままでは、育ってくる子どもたちが社会に出ても、活躍できる場がないという結果になりかねません。この面で、企業経営者はもっと学校現場に出ていくべきだということになったわけです。

出張授業を始めて9年目になりますが、まだまだ偏差値重視の考え方が変わっていないという印象です。社会が大きく変化したことを、教育現場はもちろん教育行政に関わる人たちにも訴え、教育体系の変更を促していく必要があると考えています。

職場体験学習を前に 「働くことの意味」を 考えさせる授業

練馬区立石神井西中学校



9月21日、練馬区立石神井西中学校で実施された出張授業には、遠藤勝裕氏（委員長／日本証券代行 取締役相談役）、大塚良彦氏（副委員長／大塚産業クリエイツ 取締役社長）、小林いずみ氏（副代表幹事／メリルリンチ日本証券 取締役社長）、畠山襄氏（国際経済交流財団 会長）、廣川和男氏（スミセキ・コンテック 取締役社長）の5名が参加。2年生の5クラスをそれぞれが受け持ち、50分間の授業を行った。

石神井西中学は「自由と自治」の精神を開校以来の伝統とし、練馬区では唯一の私服（自由服）の

公立中学校である。

同校での出張授業は今年が2回目。昨年度は「進路の話を聞く会」と題して、卒業後の進路を生徒に考えてもらう一助にしようと、3年生を対象に行った。今年度は、働くことに対する理解を深めてもらうことに焦点を当て、11月に職場体験学習を控えた2年生を対象とした。「働くこと」について考える契機として出張授業を活用し、その上で、職場体験に臨むものである。

このような学校側の狙いを受けて、5名の講師は、それぞれの経験談を交えながら働くことの意味

を生徒に伝えようと熱弁をふるった。小林氏は、「どういう職業に就こうかを今の時点で狭める必要はないが、自分はどんな分野、どんな世界で活躍したいのかという気持ちは持っていてほしい」と訴えた。廣川氏は、「中学生の君たちには、今しかできないことがたくさんある。いろいろなことに挑戦すべきで、その中から、今の自分を見つめ直すことがとても大切だ」と語りかけた。畠山氏は、「会社で求められる人材」「社会生活の中で必要とされる資質」について説明し、具体的な心構えをアドバイスした。

生徒の感想文から

遠藤さんの話の中で、一番強く心に残ったものは、「働く」とは「ハタを楽にすることだ」ということです。だから、世の中を作っている自分が楽になることで、結局、世の中が良くなるんだと思いました。

（遠藤氏担当クラス男子）

「仕事とはどういうイメージか」の答えは、大変だけどいろいろなことをしながら楽しむものだと思います。部活も同じだと思います。練習は大変だけど、一生懸命やれば、やるだけ成果が出るし自分に自信がつくと思います。

（大塚氏担当クラス女子）

「成果＝能力×意欲²×心の姿勢」というのが、スクリーンを見てすぐに「メモしよう！」と思ったことです。心の姿勢というのは、自分なりには、「自分の性格」や「ものの考え方」などかな、と考えました。

（大塚氏担当クラス女子）



私は大学を卒業してから約40年間働いてきました。今改めて「働くこと」の意味を考えてみると、それは「傍（はた）を、楽（らく）にすること」なのだろうと思います。「はた」とは自分の身の回りのことで、お父さんにとっての「はた」は家族です。家族が安心して生活できるように働くことが原点で、それが身近な人から地域の人、社会全体にまで波及していくことで、世の中全体が幸せになるのです。私も

——遠藤勝裕氏

働くことは、
「はたを、らくにすること」

皆さんと同じ頃、「世の中のために働きなさい」と言われましたが、当時はその意味がわかりませんでした。しかしその後、日本銀行に入って、いつでも、どこでも、みんなが安心してお金を使える状態にしておく仕事を経験し、身近な仕事のひとつひとつが重なり合い、結果として世の中のためになるということを実感できるようになりました。職場体験に臨む際には、今日話をぜひ思い出してみてください。

受験勉強などの影響からか、わからない問題に出会うとすぐに「捨てる」、すなわち、諦めたり後回しにしたりする傾向があるような気がします。その結果、その時々でやらなければいけないものが後回しにされてしまいがちです。これは会社では決して許されません。トヨタ式の生産方式や日産の企業改革などについて皆さんも聞いたことがあるかもしれません。こうした企業が成功している背景には、社員一人ひとりが

——大塚良彦氏

どう習うかではなく、
どう自分で考えるかが大切。

とりがわからない問題を捨てるのではなく自主的に考え、課題解決に向けて全員で取り組んでいるからなのです。

これから皆さんは職場体験に行くわけですが、どう習うかではなく、様々な事柄に対して常に自分自身の頭で考える習慣を身に付けてください。目標を設定し、計画を立てて行動を続けると習慣になります。正しい習慣は人格を磨くことになり、皆さんの人生も変わってくるはずです。

学校のテストは全部できて100点だけど、会社では言われた仕事ができやっとならなくて0点で、他に付け加えなければいけないということが分かって、会社と学校がちがうということがよくわかりました。

（小林氏担当クラス男子）

私がお話を聞いて感じたところは、最後に廣川さんが言っていた「ヒトは独りでは生きていけない」ということです。これからはもっと、今より身のまわりの人を大事にして、くらししていこうと思いました。

（廣川氏担当クラス女子）

未来は日本が中国やインドに負けると聞いたとき、僕は負けなければいいなと思った。将来、こういう仕事につくかわからないけど、もしついた場合、一生懸命やり中国やインドに抜かれないようにしようと思った。

（畠山氏担当クラス男子）

出張授業オリエンテーション

学校の現状、要望を聞き 出張授業の質の向上を図る

学校と企業・経営者の交流活動推進委員会は9月18日、「出張授業オリエンテーション」を開催した。同オリエンテーションは、交流実績のある学校の先生方から直接意見を聞き、出張授業に役立てようという趣旨で、2001年度から実施している。今回は、墨田区立文花中学校と昭和女子大学附属昭和高等学校・昭和中学校から、両校の校長を含む4名の先生を招き、ヒアリングと意見交換を行った。

初めに、文花中学校の渡部校長が発表を行った。渡部氏は、「出張授業の目的は、地域・外部団体の教育力を導入し、学校に社会の風を入れること」と述べた上で、ゲスト・ティー

チャーへのお願いを語った。その中で、『魅力ある話し方20箇条』を紹介し、「子どもは15分も続け

て話すと飽きてくる」など、具体的なアドバイスをを行った。出席した委員には大いに参考となる内容だったようだ。

次に昭和高等学校・昭和中学校の渡辺校長と岩崎進路指導部長が発表を行った。渡辺氏によると、「出張授業は、教員の意識改革を含めた本校の教育改革の重要な要素のひとつであり、今、成果を上げつつあるところだ」という。続けて岩崎氏からは、出張授業後に



行ったアンケート調査の結果が紹介された。それによると、「自分自身の生活を見つめ直す良い機会になった」とする生徒が85%、「将来の目標や進路に対して役立つ発見・刺激があった」とする生徒が74%と、出張授業が生徒から積極的に評価されていることが確認できた。

また、両校共に「子どもたちに



遠藤勝裕委員長



小林恵智副委員長

来賓

墨田区立文花中学校



校長
渡部 昭氏



教務主任
高圓省三氏

私立昭和女子大学附属
昭和高等学校・昭和中学校



校長
渡辺満利子氏



進路指導部長
岩崎昌男氏

夢や目的を持たせるような話をしたい」と強く訴えた。単に社会の動きを学ばせるだけでなく、もっと大きな意味付けを出張授業に期待していることがうかがえた。

最後に意見交換が行われ、小林副委員長（インタービジョン取締役会長）からの「食育」への取り組みに対する質問を

皮切りに、父親や地域社会の教育への参加、教員の60歳定年制と再任用、学校経営と校長の権限など、多岐にわたるテーマについて討議が行われた。これを受けて遠藤委員長は、「学校行事への参加を理由にした休暇を企業はどう評価しているかなど、我々自身が考えなければならない問題もある」と述べ、会合を締めくくった。